

追悼 恩田 彰先生を懐かしく思い出しながら

杉山憲司（東洋大学）

東洋大学で文学部長を務められ、名誉教授・応用心理学会名誉会員でありました恩田先生が2015年7月21日にご逝去なさいました。享年90歳でした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

恩田先生は、1972（昭和47）年「創造性の研究」で東洋大学から文学博士を取得されています。先生のご研究は『創造性の研究』、『禅と創造性』、『仏教ないし東洋哲学の心理と創造性』などの著書があり、東洋哲学や東洋の行法にご造詣が深く、また、創造性の研究を今日で言うポジティブ心理学の視点から、教育や臨床心理学に応用することを大切にされていました。

杉山の理解の浅さ故の不足や偏りはご容赦いただき、以下に先生のご業績と応用心理学について記させていただきます。



恩田 彰先生

『創造性の研究』について

先生は序論で、「社会が創造と革新を要請し、人間の創造性に期待するところが多くなった。人間の可能性の実現に期待する傾向は、最近になって著しく目立つようになってきた」、「創造性とは何か、測定できるのか、創造過程のメカニズムとは、創造性の開発と促進・阻害条件とは何か」に興味を持たれたと記されています。そこから、「異質の情報や物を今までにない仕方と結合し、新しい価値あるものをつくりだす過程」と定義され、新しい価値には社会的規準と個人的規準があり、後者の視点から、幼児の創造性育成を課題とされています。測定については拡散的思考や直感的思考を測るべく、Guilford, J.P. の原案になる「S-A 創造性検査」を標準化し、東京心理株式会社から発行されました。この検査はTorrance, E.P. の方式を参考に、新用途考案で応用力を、装置考案で生産力を、結果予測で空想力を測定し、回答の速さ・広さ・独自さ・深さから評価するだけでなく、「その他」のカテゴリーを設けて基準にない回答に高得点を与えることで創造性検査の独自性を示しています。先生からいただいた採点基準は、今も手元にあり、ご説明下さった優しい表情と共に思い出されます。創造メカニズムとしては意識的に統制できない過程が重要で、発散的思考、想像力と直感に加えて、小さなことも見逃さない感受性、偶然な現象にも心を開き受け入れる態度、専門知識や経験が豊かであることを重視されました。創造性の開発法は、子どもでは創造性が生まれる基盤、創造性を養う発見学習、それに児童の特質を重視され、成人ではブレイン・ストーミング、KJ法、シネクティクス、NM法等の諸技法を取り上げています。また、心理療法と創造性の共通点、東洋と西洋の発想法の比較から、注意集中と瞑想、至高経験等の意義を説かれています。

『禅と創造性』について

本書で、Murphy, G. の著作で創造性の考えにふれ、思考の概念とすでにあたためていたパーソナリティの概念が一つにまとまって創造性の概念が芽生えたと述べられています。また、当時の文部省総合研究の分担課題「創造活動と禅の体験における創造過程の心理学研究」、「禅の創造性に関する研究」に参加されました。そこでは心理療法やカウンセリングの究極の目的に創造性の開発があるとの視点から、座禅を催眠法、自律

訓練法, ヨーガ等と比較して, 瞑想法, 即ち, セルフコントロール法と位置づけ, 座禅が心身の自然治癒力を促進し, 諸能力や創造性の開発に役立つことを明らかにしました。東洋の心理学は身体と心をつつのものとして全体的に見る傾向があり, それが心から身体へ, 身体から心へのみならず, 心身一如として全体的にとらえるホリスティック医学を生んだと説明されています。禅とカウンセリングについては, あるがままに見る現実の直視, 二値的・対立的な見方を捨てる多値的な見方, 心理的自由の重視などの諸項目をあげ, 両者には本当の人間になるための実践として共通点があると結論づけています。

『仏教の心理と創造性』について

本書で「二十一世紀は創造性の本質である独創性が求められる時代である」, 「独創性はその人らしさを示す独自性や個性が基礎にあって新しい社会的, 文化的な価値を生み出す」, 「心理臨床やカウンセリングにおいて, 心理的治療過程を創造過程としてとらえ, 治療的想像力の開発が求められるようになった」と言っています。そこでは, 浄土教の三心, 即ち, 至誠心は Rogers, C.R. の一致性または純粋性のことで, あるがままの自然の生き方, 深心(深信)は自己の内なる本質に無心にまかせること, 廻向発願心は自己と他者の往生を願って唱える念仏三昧の注意集中や禅定のことで, これらを通じて変性意識状態に導かれます。先生は念仏の集中に対して, 禅定はとらわれる心を自由に開放して拡散させるやり方であり, 念仏と禅を双修することで心身の治癒力を促進し, 一種の安らぎと自由と能動性が生まれ, 今まで気づけなかった新しい事実に気づくなど, 潜在的な創造力が出てくると言っています。

21 世紀の現代, 何度目かの国際化・グローバル化を迎えています。国際化は標準化と個性化と考えるなら, 西洋の移入ではない東洋の哲学と行法に基づく心理学, 心理治療から創造性開発へ, 研究の科学を創設する夢等, もっとお伺いしておけばよかったとの思いしきりです。私心の無い, 公平・公正な先生でした。合掌。

■主な著書

1971 年 『創造性の研究』 恒星社厚生閣 (1972 (昭和 47) 年 文学博士)

1974 年 『創造心理学』 恒星社厚生閣現代心理学双書

1980 年 『創造性開発の研究』 恒星社厚生閣

1994 年 『創造性教育の展開』 恒星社厚生閣

1995 年 『禅と創造性』 恒星社厚生閣

2001 年 『仏教の心理と創造性』 恒星社厚生閣

その他, 1996 年「創造性の研究—私の歩んできた道と課題—」, 1998 年「浄土教における念仏の心理—選択集を中心に—」等の論文, Smith, J.A. 1973 年『創造的授業の条件設定』, Ray, M.L. & Myers, R. 1992 年『クリエイティビティーインビジネス』の翻訳等, 著書論文多数。

■日本応用心理学会での役職

1957 年 道徳教育委員会委員

1973~1999 年 常任運営委員 (現常任理事)

1982~1986 年 国際心理学会記念基金運営委員

1991 年 「応用心理士」資格認定検討委員会委員

1995 年~ 名誉会員

■日本応用心理学会での「公開シンポジウム」シンポジスト

1969 年 「能力開発に関する心理学的諸問題—創造性の開発を中心に—」

1981 年 「中年期の危機と飛躍」

1986 年 「青少年の自殺」

1992 年 「宗教と癒し」

1995 年 「心のコントロールをめぐる諸問題」